

町民参加の町史づくり



1994.9.30(金)

第 6 号

竹富町史だより



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目 次

『竹富町史』第十一巻資料編「新聞集成Ⅰ」の発刊	(1)
「戦争体験記録」発刊に向けて	(2)
戦さ場の実相	(3)
—西表島内離への避難	(4)
戦災実態調査状況	(5)
戦争体験聞き取り調査	(5)
県地域史協議会総会及び研修会	(6)
戦時・戦後体験記録の募集要項	(7)
歴史の証言	(8)
—小浜島のカツオ漁業	(9)
新聞で知る町の今昔	(10)
写真にみるわが町	(11)
戦跡をたずねて	(12)
波照間島のクリヨン	(13)
聖地めぐり	(14)
受贈図書紹介	(15)
購入図書紹介	(16)
業務日誌	(17)
編集後記	(18)
	(19)
	(20)
	(21)
	(22)
	(23)
	(24)

表紙の写真

竹富小中学校にある井戸から水を汲み上げる光景である。昭和31年2月、同校に風呂が出来た。場所は宿直室の脇で、6、7人が同時に入れる程度の風呂だった。風呂は男女交代で一日おきに使われ夕方になると5、6年生が鐘を打ち鳴らし「男風呂」「女風呂」を知らせた。

(写真提供・前新トヨさん)

『竹富町史』第十一卷資料編「新聞集成Ⅰ」

一 明治・大正期の記事を収集し発刊――

竹富町の明治・大正時代の新聞記事を集め、「竹富町史」第十一卷資料編「新聞集成Ⅰ」を、このほど発刊しました。平成四年度に発行した写真集「はいぬし

まじま」に次ぐもので、新聞記事は明治、

大正期の竹富町の政治、経済、文化、教育等を書き綴つて社会世相を反映しています。「新聞集成Ⅰ」の発刊に向

てはマイクロフィルム化された『琉



発刊された「新聞集成Ⅰ」

球新報』『沖縄毎日新聞』の印影本を取り寄せ、その中から竹富町と関係のある記事を探索、見出しを一覧表にまとめるところから作業を開始しました。探索及び収集した記事の件数は、九百七十四件に達しました。

記事は多彩で中には個人のプライバ

シーに関わるものもあり、それらは削除しました。記事の選択については、第一卷小委員会で一次、二次、三次と検討を重ね委員会の記事評価をもとに、最終的に編集室で収録記事を決定しました。その数は八百十二件に及びます。収録されなかった記事は百六十二件で、それは整理して町史編集室に保管しております。「新聞は時代を映す鏡」と言われ記事を読むと明治、大正時代の政治、経済等を窺い知ることができます。本巻は沖縄本島の新聞を取り上げましたので直接、竹富町に関する記事は少ないのでですが、それでも貴重な資料となることは確実です。編集では記事は当然ですが、巻頭に口絵を配し総説、五年単位の年次解説等を盛り込みました。巻末には町関係略年表、不採用記事目録、索引を入れました。本巻は全体で六百八十四頁になりました。

なお本巻は文教図書八重山支店、山田書店、村中書店、明治事務用品社（八重山）、ロマン書房、緑林堂（沖縄で本島）で販売しています。価格は二千円。

町史第十一・十二巻編集小委員会

竹富町史第十二巻資料編『戦争体験記録』及び第十一巻資料編『新聞集成II』の発刊に向けた編集小委員会を六月十六日、町史編集室会議室で開きました。委員会では『戦争体験記録』の編集構成等について話し合いました。

小委員会は編集作業を具体的に進める組織で今後、編集の核となり戦災実態調査や戦争体験聞き取り調査、戦争関係資料の収集等に取り組みます。

『戦争体験記録』は満州事変（昭和六年）から太平洋戦争の終結（昭和二十年）に至る十五年戦争、戦後復興までを対象に編集します。

小委員会では事務局が編集の大枠を示して、論議を重ねました。事務局が提案した編集構成は、竹富町の戦争の実相を明らかにするために①戦争全般に関する概説②軍人、軍属、一般住民の戦争体験

記録③戦災実態調査の島別総括、旧日本軍関係資料一を基本に設定するというものです。

委員会の中で戦争全般については太平洋戦争、沖縄戦を捉えつつ竹富町の戦争に焦点を当てること。また町出身者の戦争と町内の戦争の両面から戦争をくくることも確認されました。今後、各種資料を収集しながら編集構想を練り上げます。

『戦争体験記録』は、戦争の実相を明らかにし、戦史の証として後世に残そうと発刊するものです。編集は①戦災実態調査資料②戦争体験者の手記及び聞き取り調査資料③旧日本軍やアメリカ軍関係の戦争資料④町役場保存の援護関係資料を基礎に進めます。

戦災実態調査は、戦争中の町内全世帯を対象に実施します。戦時中に町内に住んでいた人々は現在、町

『戦争体験記録』発刊に向けて

第二回町史編集調査協力員説明会

も対象になります。調査項目は、十五年戦争の始まりから昭和二十年までを年代枠とし、その間の家族氏名、家族数、戦争被害状況、徵用等を設定し様子を明らかにします。

戦争体験者の手記や体験聞き取り調査は、個々人の体験を記録に残し戦争を浮き彫りにするものです。旧日本軍の戦争資料は、戦争体験や戦災を裏づけるため収集するものです。調査協力員には新たに島仲三郎さんを委嘱しました。

竹富町史第十一巻資料編『戦争体験記録』の資料収集等に向けた第二回町史編集調査協力員業務説明会を四月二十八、町史編集室で開きました。協力員会議では戦災実態調査及び戦時・戦後体験記録の手記、聞き取り調査について説明しました。

戦さ場の実相

—島じまの語り部たち—

西表島内離への避難

前底光雄（黒島出身）

昭和二十年五月頃、私の父、前底光義（当時四十六歳）は、日本軍より「西表島に避難せよ」との命令を受けた。当时、保里部落会長であった光義は、軍からの公文書を保里部落民に伝える役目であった。黒島の全部落（宮里、保里、仲本、東筋、伊古）で協議した結果、部落別にそれぞれ避難することに決した。

軍は再三にわたり「早く避難」するよう命令を下し、とうとう保里部落会長であつた光義へ「お前の家族から避難せよ」と命じた。やむなく光義は夜間、サバニ（長さ約四メートル、幅八十五センチ）で家族を黒島から内離へ避難させたが、大家族（十三人）であつたため四、五日間要した。

内離へ避難したのは結局、前底家と登野城家（父・太郎、母・クヤ、長男・松、長女・ツル子、次男・亀吉）のみであつた。しかし避難早々から蚊の発生に悩まうとのことで西表古見村の南方海上に位置する内離（うちばなり）を集團避難場所と定めた。そこは西表島から約五十キロ離れた周囲六百メートルほどの小島である。

保里部落は、そこから各世帯より一人ずつ参加して掘立小屋を設営することにした。昼間は烈しい空襲のため、夜間、敵機に気付かれないよう各自サバニで現地に参集。カヤ、ナワ、ノコ、カマ等を持ち寄り、幅約三間（五・四メートル）、長さ二十メートルのカヤ葺きの掘立小屋を何とか造つたが、マラリヤを恐れて誰も避難しようとはしなかった。

軍は再三にわたり「早く避難」するよう命令を下し、とうとう保里部落会長であつた光義へ「お前の家族から避難せよ」と命じた。やむなく光義は夜間、サバニ（長さ約四メートル、幅八十五センチ）で家族を黒島から内離へ避難させたが、大家族（十三人）であつたため四、五日間要した。

内離へ避難したのは結局、前底家と登野城家（父・太郎、母・クヤ、長男・松、長女・ツル子、次男・亀吉）のみであつた。しかし避難早々から蚊の発生に悩まされた小屋には蚊帳もないで蚊に刺されっぱなしの生活で結局、前底家は一ヶ月もしないうちに全員マラリアに罹った。光義はこの場所で一家全滅するより島に帰つたほうがいいと家族全員、命からがら黒島へ引き上げた。

昭和二十年六月、保里部落の人々は前底家や登野城家の惨状を見て恐れをなし、避難場所を西表島古見近くのカサ崎（嘉佐崎）へ変更した。全員病に冒された前底家の人々は第二の避難場所に移る体力はなく、ただ神に手を合わせしか術がなかつた。

七月のある日、とうとう母・ヒサ（当時四十六歳）が機銃掃射で右足首を貫通された。マラリアに冒され衰弱しきっていた体は多量の出血に持ちこたえることができず、その夜、死亡した。光義は古見村の後方の山に避難小屋を造りに行つて不在だった。私、光雄は母の悔しそうな、無念そうな顔を今だに忘ることはできない。

母の野辺送りは、島に残っていた二、三人の男性に手伝つてもらつて執り行なつた。当時、黒島でも召集されないでいた青壯年男子も特設警備工兵隊として、島には婦女子や子供、老人ぐらいしか残つていなかつた。

私たちには敵機の爆音が聞こえるたびに

柩を路上に置いて身を隠し、それを何回も繰り返し、やっとの思いで前底家（家元・東前底家）の墓にたどり着いた。しかし光義の家族は西前底家（いりまいすくや）と呼ばれ分家であったので、家元の墓に母を埋葬することはできず、その敷地内に亡骸を埋めた。

八月になり、残された乳飲み子の幸子（九女）は、誰からも乳が貰えず、とうとうマラリアと栄養失調で骨と皮ばかりとなり、静かに息を引きとった。当時の日本軍は牛、山羊、野菜あるいは住宅の天井板までも剥して没収していく。今にして思えば、畜産の乳でもあれば幸子は死なずに済んだものと、残念でならないだろう。（当時、十五歳）

（石垣市新栄町十四番地）



軍隊手帳

戦災実態調査状況

—調査票が次々と編集室に—

竹富町の戦争被災を把握する戦災実態調査が、各島の世帯のほか石垣、沖縄本島、本土在住の郷友会を対象に実施されています。各島では調査協力員の協力をもとに、各世帯に調査票を配布したのち回収し、郷友会の場合は調査票を郵送し回収しております。町民や関係者の協力を得て現在、調査票が次々と町史編集室に送付されています。

戦災実態調査は平成七年度に発刊予定の『竹富町史』第十二巻「戦争体験記録」に盛り込み、竹富町における戦争の実相を明らかにするために行われております。戦災を対象とする調査期間は昭和十六年八月から二十年八月までとし、その間の島じまの戦争の実相を浮き彫りにさせます。調査は大きく一般住民と軍人、軍属、準軍属と対象者を分け昭和十九年当時の家族構成や軍による土地接収、徵用

等を記入することになっています。

一般住民体験では戦争による負傷、病気、死亡等のほか疎開、避難の項目を設定しています。竹富町の島じまでは戦時中、軍命による強制疎開で多くの人が亡くなりました。調査では具体的にマラリア禍が吹き荒れたことが明らかになっています。さらに住宅が兵舎に使用されること、土地が軍に強制的に接收され今だに返還されていないこと等も分かってきました。

軍人、軍属、準軍属体験では軍隊、防衛隊、学徒隊等の項目を設けました。調査から徴兵検査を受け中国大陸、南洋諸島、東南アジアに派遣された人、石垣島の白保飛行場の建設に携わった特設警備工兵隊や遊撃隊に入隊した人等が浮かび上がっています。また爆撃や空襲で家屋が破壊されたこと、畜産が供出されたこと等が数値で明白になっております。調査は基礎資料となるもので今後も続きます。そのためには町民や関係者の協力が必要になります。未提出の方は早目に送付するようお願いします。

戦争体験聞き取り調査

—島単位に順調に進行中—

『竹富町史』第十二巻資料編「戦争体験記録」に盛り込む戦争体験者の証言を聞き取る作業が、各地区で順調に進んでいます。



小浜島での戦争体験聞き取り調査

争を語っている。証言記録は聞き取りにとどまらず、体験手記も募集しているが、次々と原稿が寄せられている。

戦争体験聞き取り調査及び手記募集の対象者は、沖縄戦及びその前後において戦争を体験した町関係者、町内に駐屯した軍隊の関係者、戦後復興に関わった者等。体験聞き取りの中から戦争の実相を浮き彫りにさせる、としている。

沖縄戦の末期に八重山では各島は空襲に見舞われ、被害を受けた。加えて軍命により住民はマラリア有病地域へ強制退去させられ、竹富町では七百八十五人が死亡したといわれる。空襲で全滅した家屋もあった。

軍関係では竹富島に大石部隊が駐屯、黒島、波照間島には残置工作員が配置された。西表島西部には船浮要塞が構築されたほか、ゲリラ戦を見込んだ護郷隊も組織された。

戦争体験聞き取りの中から小浜島ではいる。黒島を皮切りに始まった作業だが、これまでに五十人余の人々が五十年前の体験を思い起こし、記憶を辿りながら戦

県地域史協議会総会 及び研修会

—豊見城村で開かれる—

一九九四年度総会及び研修会が五月二十七日、豊見城村立中央公民館で開かれました。新代表の泉川良彦氏が就任した後の初めての総会で九十三年度会計報告、監査報告及び九十四年度活動計画、予算が審議され、原案通り承認されました。

九十四年度は『印土手石（ハル石）調査報告』『近代辞令書調査報告』『官報掲載沖縄県関係資料目録』等を編集、刊行するほか、新規に『戦後五十周年記念誌』の編集にも手掛けている。

研修会では金城善氏（糸満市史）が「近代辞令書調査報告」と題して講演しました。この中で旧慣習存期、沖縄県間切島吏員規程期、沖縄県及び島嶼町村制期の辞令書に分類して、その特徴が示された。史跡巡検は旧海軍司令部壕、瀬長城跡等を見学した。海軍司令部壕は、地下深く掘られ、戦争の様子が生きしかった。

戦時・戦後体験記録の募集要項

一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富

町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたこ

とのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町

出身者。

二、戦後復興で（生活等）竹富町内で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍隊等。

二、記録の対象期間

一九三一年（昭和六年）満州事変

と一九七二年（昭和四七年）五月十五日本土復帰まで。

三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚から二

〇枚程度。

四、原稿の締切

平成七年三月末日までとする。

五、収録決定は、竹富町史編集委員会

が行います。

六、収録の場合添削があります。

七、収録された方には冊子（体験記録）

編集取材協力記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたします。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和十九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も左記へご連絡下さい。

連絡先

二九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地

竹富町役場（町史編集室）

二〇九八〇八一一一九九八五

戦争体験記録の意義

太平洋戦争が終結して五十年目に入りました。当時、若者だった人々も時の流れの中で高齢者となり、戦争体験者の老齢化が進んでいます。そのような中で戦前の社会を浮き彫りにし、戦争の実相を確実に掌握する視座から体験者の証言を記録に止め、戦争資料として残す必要があります。

戦争体験者の証言を記録保存することは歴史の発掘でもあり、竹富町史編集にとっても極めて重要なことです。戦後世代が増え、戦争体験の風化が懸念されているが、戦争を直視し、恒久平和を願う立場から、戦争体験記録を速やかに集成し、戦史の証として後世に伝承していくことは大切なことと考えます。

八重山は沖縄本島のように米軍の上陸や戦闘はなかったが、激しい空襲、強制疎開によるマラリア禍が猖獗を極めました。戦争を歴史の一ページとして記録することは意義のあることです。

《歴史の証言》

—小浜島のカツオ漁業—

大山朝康（九〇歳）

那覇市松尾一一〇一四

◆はじめに



小浜島の西端

にある細崎は、明治末期頃から漁民の村として誕生し、今日に至っています。

村落は現在、沿岸漁業が盛んで六十人余の人々が住んでいます。大正期にはカツオ漁業が営まれ、大いに繁栄しました。大山さんは大正十二年頃、浜崎荘市氏が勤務した期間は約三年間でした。一年間の労働期間は、カツオが周辺海域に回遊す

る五月から十月までの半年間で、賃金体系は配当制で現在とは異なっていました。大山さんの語りから当時のカツオ漁業やカツオ製造人の生活の様子を窺い知ることができ、貴重な証言を記録することができました。

◆製糖工場からカツオ工場へ

小浜島に行く前のことからお話をします。私は尋常小学校の卒業ですが、卒業して一日も休まず、事前に契約してあった給仕の仕事を就きました。当時の給仕は女性はやりません。女性がやると、極端に言うと売春婦に見られてしまいます。私はそこへ給仕として入ってきました。勤務先は台南製糖株高嶺工場です。最初に

仕事をした会社が台南製糖株といつてあります。八重山に渡るまでの十八歳までは、そこで働いていました。そうする中で義理の叔父の玉那覇忠受さんから「小浜島のカツオ工場に来なさい」と呼ばれ、それで小浜島に行きました。叔父はカツオ工場を経営する浜崎荘市さんの下で、カツオ製造主任として働いていました。前列左端の帽子をかぶり、ネクタイをしている人が叔父です。（次ページ写真）浜崎荘市さんはカツオ漁船を二隻、所有していました。一号船と二号船。だが船名は、はっきりと覚えていません。大正十二年の新聞にある恵比寿丸だったかも知れません。とにかく一号船のカツオ製造人として雇われ、そこで働きました。つまり台南製糖株で働いているところを叔父から説いて受け、小浜島の浜崎荘市さんのカツオ工場で働くことになったということです。当時の仕事は重労働で大変でした。

◆賃金は配当制

カツオ工場の仕事をすることを話します。作業は分業です。まずはカツオ漁船で、そこには釣り人、機関士、船長がいてカツオを求めて海域を回り、カツオを釣り上げ、工場に帰って来ます。一号船の船長は玉城盛光さんで、船の操縦は素晴らしいものがありました。そして工場

で働く製造人です。製造人は漁船が釣ってきたカツオをさばき、カツオ節に仕上げるまでの作業をします。写真に載っている女性たちは、カツオ削りの仕事に携わっていました。



浜崎莊市氏が経営するカツオ工場。後列の左端が大山さん。
前列の左端は叔父の玉那霸さん。（大正十年頃）

カツオ工場で働いている人は、沖縄本島の人のが地元の人もいました。小浜島の従業員では、大嵩家のナビマという女性がいたのを覚えています。それに真鍋という入墨をしていたゴロツキ男もいました。その人は名前からしてナイチャーに間違いないでしょう。カツオ削りの女性は糸満、名護、八重山とあちこちから来ていました。

八重山は大正十年当時、カツオ漁業の全盛時代でカツオ漁船は五十隻ほどいたと思います。小浜島には浜崎莊市氏の一號船、二号船、それに西銘順治さんのお父さんが経営する漁船の合計三隻いました。カツオ工場では私が最年少で仕事は、叔父がカツオ製造主任だったことから、ずっとカツオ製造の仕事をでした。

カツオ工場は細崎にあったが、工場で働いている人たちは、工場の宿舎で寝起きをして生活をしていました。寝起きの

は違い当時は配当制です。カツオ工場で働いている人に対する賃金は、親方が食料から何から何まで全部、支給します。それを工場で会計を担当している人が計算します。一号船にも事務扱いの人がいて出納をみました。カツオ漁期は五月から十月まで、秋になると終了し働いている人々は引き揚げます。秋のカツオ漁はダメです。引き揚げに際して帳場を整理します。その時、半年間の収支決算を行ない、必要経費等を計算して純利益を出し各々、働いた人々に配当していきます。配当金は技術力や年季によって、それは違うでしょう。とにかく賃金は月給制ではなく、配当制であるということです。でも私は配当金を貰ったことがありませんでした。全て叔父さん任せでした。

カツオ漁期が終わると各人、それぞれ自分の行き場に引き揚げるが、私は糸満にある自分の家に帰りました。後は自由業です。働いていた人の中には農業をする人、ほかの仕事をする人など各人で自由です。だが親方は機関士を地元に置いて来期の漁業に備えます。そしてカツオ

漁の時期になると、船長なんかはあちこちから人手を集めています。

カツオ漁期は定期的だが、前年に働いていた人は全て、また戻って来るとは限りません。働きたい人もおれば、辞めた人もいるでしょう。中には「雇つてくれませんか」と来る人もいます。そこで船長が気に入れば、雇つてくれるでしょう。そうする中で船長は働く人を探して来るのである。それは今とは全然違います。

そして私は翌年の四月にまた、小浜島に行きました。

◆ 貨客船は一端、石垣島に

当時、沖縄本島から八重山に行くにはどうだったのかと言いますと、まずは航路です。当時の航路は内台航路といつて、宮古丸と八重山丸が運航していました。那覇から台湾に行くには那覇—宮古そして八重山に渡り、台湾へとたどり着くのです。八重山の港は西表島の船浮港です。石垣島には港がないから、到着した船は石垣島と竹富島の間に沖泊まりします。

その船は石垣島から約二、三の沖合に浮かんでいます。石垣島の沿岸は遠浅で、船は横づけできないからです。そのため沖合いの船となる訳です。沖泊まりの船には船が往来し、作業員の荷役作業が行なわれます。数時間して船は作業を終えて日没までに船浮港に着くように石垣の港を出ます。そして夜、台湾に向かって出航します。

要するに那覇から台湾にはと言いますと、午後四時頃に那覇港を出航し、明るいうちに慶良間諸島を通過します。そして南下し航行は、宮古島近くで明るくなるように船舶を進めます。それは宮古島の近海には八重干瀬があり、珊瑚礁が浮き出ているため危険であるからです。宮古までは視界がきく明るい間に通過しなければなりません。時間とコースを間違えると大変です。それは船長がしっかりと心得ています。海の状況、時間の流れを頭に入れ確実に航行しなければなりません。小浜島に行くには、まず石垣島に寄らなければなりません。石垣島に一端、海上がってから小浜島に渡ります。石垣島

では荷物の陸揚げがあります。それは船で小浜島に行くにも当然、船であります。今は交通の便がよいが、昔はそうではありません。船で石垣—小浜間を行きました。

◆ カツオ節は那覇市場へ

小浜島のカツオ工場での食料品は、貨客船が直接、持つて運びません。石垣島では荷物は一度、陸揚げします。そしてその後、船に食料品を積んで小浜島に持つて渡ります。船は小さいものではあります。相手大きいものです。石垣島と小浜島の間を行き来する訳ですから。台風になると大変です。それは船と同時にカツオ船も同じです。

台風が突然、近付いて来ます。小さなカツオ船等は普通、沖合いに停泊して出漁します。そこで台風に遭います。その場合どうするのかと言いますと、船は帰つて来ると泊まりではなく、その時は海岸の砂浜を目掛けてフルスピードで浜にのし上げます。その方が安全であるからで

す。カツオ工場では、そのようなこともあり船を守るのに苦労しました。

小浜島のカツオ工場で働いている人は全部で約七十人ほどでした。仕事は分業で餌取りは、餌取りという具合でそこに親方がいました。船長は親方から餌を引き取り、釣り人を指示してカツオを釣り上げました。カツオ漁船は全て船長の権限でカツオ漁をしているのです。餌取りは餌取りの権限です。カツオ漁船が到着すると、今度は製造人の出番です。製造人はカツオを製造して荒カツオ節を作り上げます。そして女性たちがカツオ節の削りを行ない仕上げます。

カツオ節が出来上がると、次は出荷となります。それは製造人の仕事です。カツオ節製品の出荷先は那覇です。本土ではありません。那覇には取引先がありまします。それは工場の親方である浜崎莊市氏や船長らが相手方と交渉して決めます。そこにはカツオ節の相場があります。小浜島からカツオ節を那覇に出荷するには船で一端、石垣島に運び倉庫に保管した後、貨客船で運搬されます。

カツオ工場での労働時間と言いますと、一日に働く時間は別に決っておりません。

労働時間に制限はないのです。賃金制度は月給制ではなく、配当制であるからです。生身のカツオを取り扱う訳ですから、働く時は働けるだけ、作業が終わるまで働きます。働く時間を決めてカツオをそのまま放つておく訳にはいきません。カツオを製造して乾燥させ、カツオ節が出来上がると、今度は体を休め、ゆっくりできます。しかしそれまでは気を緩めることはできません。

◆旗が信号代りに

カツオ漁船が入りカツオ製造になると大急がしですが、一日の中で時間をゆったりと使うひと時もあります。六月の海が風の日には五、六人で対岸の西表島に天馬舟で渡ることもあります。それはマーニ（クロツグ）の葉を取るために帰ります。潮の干満を見て島に戻ってきます。どうしてマーニを取つて来るのか、と言いますとカツオが海岸に運ばれて来た時、

カツオを直射日光から防がなければなりません。マーニは陰を作るために取つて来るのでです。それで製造人たちは一日の作業が暇な時は、天馬舟を漕いで西表島に渡りマーニを取つて来ます。舟を漕ぐのは一番年下の私の役目です。私は最年少ということでき使われました。

カツオ製造のない時の作業は色々あります。薪を割つたり、軽油を積み上げたり船が漁に出るまでは多くの仕事があります。船が漁に出るとなると、今度は旗の準備をします。船では旗は信号の代りです。その頃は無線がありませんから船は、工場に到着するのを旗で知らせる訳です。それはカツオの漁獲高も示します。日の丸だと約三百四、ミールでは三百四以上、ゴイルからは満船です。カツオ船は旗をたなびかせ、工場に合図を送ります。たなびく旗は遠くから見ることができます。当時は望遠鏡がありません。肉眼で旗を見てカツオ製造の準備に取り掛かります。船が着きゴイルの満船だと作業はとても忙しく、時には二、三日間ほど徹夜することもあります。

◆暇な時には相撲も

カツオ製造は忙しい時は非常に忙しいですが、仕事ばかりではありません。仕事ばかりでは大変で体が持ちません。当然、体を休めますが、これといった娯楽はありません。例えば雨が降っているとか、今日は製作業がないとか、カツオ漁に出ないと、という時もあるが別に娯楽がありません。天気が良くて暇な時は、仲間で相撲をとったりしました。私は一番年下だから兄貴たちから「お前たち二人で相撲をとれ」と言わされました。私たちの相撲が始まると、後から兄貴たちは力くらべです。

小浜島には巡査がいて、彼はいつも暇になると村から下りて来て「イカ曳きに連れて行ってくれ」と私たちにお願いするのです。帰る時は納屋で先輩たちと酒を飲んで村に戻りました。帰る時は二人でカツオを一本担いで、お伴していくのです。これはお土産です。

小浜島全体の人口は、はっきりしませんが四百人から五百人ほどいたと思われます。カツオ工場で働いていた私たちと村の人たちとの交流は、もちろんありました。村芝居とか、アンガマとか、踊りがあるなど何か行事のある時は交流を図っていました。交流は酒飲みが中心で、今まで言うなら宮古のオトリのようなものでした。

小浜島には十八歳から三年間ほど生活していましたから、二十一歳までいたことになります。小浜島にいた時、徴兵検査を受けました。大正十三年の召集ですから……。徴兵検査は石垣島で行ないました。その時、私は指を切っていましてね。これが軍に見つけられて、そうなると監獄行きです。つまり徴兵忌避であるといふ訳です。徴兵検査の時、検査官が言う

には「君、それは徴兵忌避だろ」と見えたのです。すると私は「これは左指ですよ。鉄砲は持てますよ」と言いました。引き金を引く指ではないということです。それに浜崎莊市氏の証明書を持っていました。それは検査官が文句を言うので見せ

ました。指の傷は今では治るが、カツオ製造の印として今日までそのままにあります。それは理髮業には別に支障がありませんでしたから。

◆航海術の上手な玉城船長

カツオ漁業のことでしたね。漁船についてはポンポン船が入って来る時は、遠くから見えるのです。望遠鏡があると先から見えるのですが……。それでも旗を見て「今日はどのくらいあるよ」と判断して製造人で受入れの準備をする訳です。そして「みんなで準備せんといかんよ」と言って走り回ります。到着したカツオ船は百メートルから二百メートル沖泊まりしています。漁船に小舟を出すのは私の役目です。

漁船は、周囲に珊瑚礁があるため海岸には入って来れません。それで陸にある天馬舟を沖に繰り出し、漁船まで行く訳です。それと合わせて私は一番年下だから薪を割つたりするのです。薪は漁船の燃料として使われます。それに御飯も炊

きます。それは漁船が戻って来る間にで

す。軽油も十缶から二十缶ほど準備しま

す。当時の漁船は全て発動機船です。そ

れはポンポン船です。何故ポンポン船か

と言いますと、その頃は漁船が「ポンボ

ン」と船音を立てて航行するからです。

漁船は一個シリンドラーの焼玉エンジンで

す。焼玉が焼けたところで「ポンポン」

と音を立て力を出すようになります。そ

して音を引っこめます。威力は三十馬力

では大きい方で、普通は二十五馬力ぐら

いです。

八重山には当時、五十隻ほどのカツオ漁船がいたが、漁船は工場に戻る時、黒潮に乗って走ります。その中でうちの玉城船長は航海術がうまかった。カツオ漁船は普通、細崎の前に広がるヨナラ水道を通って左手に黒島、竹富島を見ながら波照間島の方に繰り出して行きます。

そしてカツオドリを探してカツオ釣りに入ります。カツオ工場に戻る時は、どうするのかと言いますと出発時の行きの遠い航路をとらず、工場に近い海路を通つて帰つて来ます。しかしその航路は珊瑚礁

礁が多く、通り過ぎるにはかなりの操舵術が必要となります。その海路で工場に帰つて来るのは玉城船長だけでした。船長は糸満の人で素晴らしい人でした。

カツオ漁業は勝負の世界です。漁船は一匹でも多くカツオを釣ろうと、カツオのいる海域を求めて動き回ります。うちの玉城船長は航海が上手だった。それに西銘順治さんのお父さんです。その人は与那国船を持っていて活躍していました。

玉城船長は海がちょっと荒れていても海に出ました。「今日はだれもカツオ釣りに出ない」という場合の時でも、うちの船長は海に出て与那国船と海上で会つたそうです。

カツオ漁船には船長、機関士のほか釣り人が十四人から十五人ほど乗り込んでいました。漁場に着くと釣り人は素早い動きでカツオを一匹一匹と釣り上げます。それに製造人、削り人の人数は断定できませんが、多い時には二十人ぐらいはいました。それは糸満や名護の人たちがほとんどでした。

カツオ工場で働いている人は散髪もし

なければなりません。村には床屋はあるが、行くには遠いのです。それに暇がありません。そこでバリカンを買って来て髪を切るのであります。それは工場で最も年下の私がやりました。もちろん我流でハサミも手にして一人ひとりの髪を刈り上げるのであります。そのことは後で理髪業をしたこととに大いに役立ちました。

カツオ工場ではこのような事もありました。ある時、海難事故が起きました。それはカツオ工場で働いていた人の事ですが、臀部を鱗に咬まれて死亡した事故です。その人は今までなら係長クラスの人です。台風の後の海は濁っています。しかしその人はだれもが潜らないと言う中を意地を出し、カツオの餌になるジャコを取るために海に飛び込みました。そして「アキサミヨー」と言って船上に上がつて来ました。ビックリしたのは本人周囲の人たちです。その時、鱗にお尻を咬まれていて、船にいた人たちが引き上げましたが、船の中は真っ赤な血でいっぱいです。そこでその人を海岸に運んで来て砂浜に上げました。しかしすでに死

んでいました。出血多量なのです。お尻は鱗に食いちぎられ、無惨な死に方でした。

もう一つの事故は台風の時に発生しました。カツオ工場では台風が接近しているというので、台風対策をすることになりました。漁船はワイヤーロープを三つ四つ結んでしっかりと巻き付け、十分に固定しました。そして船番を置いて「お前たち、ちゃんと見ておけ」といって対策をしていました。それは製造人、漁師が一緒になつて見ると船がいません。ワイヤーロープをしっかりと巻き付け、船番も三人も置いたので大丈夫だと思っていましたが、船は流されて姿がありません。残っているのは舳先だけで船体はありません。海は波が荒く船のローリングが激しいのです。そのためロープが緩み、船は波に流されて沖合に押し出されてしまつたのです。

船が見えないのにビックリしたのは船番していた三人です。「アキサミヨー」でいるはずの船がいません。これは補償

のですが、何も補償はありませんでした。船のエンジンはバラバラで使いものになりません。その時、私はカツオ工場の将来はどうなるのか、と心配し工場を辞めました。そして浜崎荘市氏のもとを離れました。しかし浜崎荘市は「戻ってきてよ」と言つたが私は「辞めるから…」といつてさようならをしました。これでカツオ工場との関わりは終わり、小浜島を去りました。

◆理容業の世界に

小浜島を去った私は、那覇の垣花で床屋職人として仕事をすることになりました。しかしそこで働いていた時、火事に遭い焼き出されてしまいました。それでどうせ働くならナイチ（本土）に行こうと思い渡ることになりました。姉さんが紡績工場で働いていたのでそうすることにしました。ナイチに行くと、そこで「琉球人」と呼ばされました。当時は朝鮮人、支那人、琉球人と呼ばれて差別されていました。今では韓国人、中国人、

沖縄人ですが…。その頃、沖縄の人は裸足だった。

大阪で勉強した時、靴を履きこれが最高でした。沖縄では裸足、本土では靴と大きな差がありました。大阪では猛烈に勉強して理容師の免許を取りました。沖縄に帰つて来た時、私が理容師の免許を持つているというので当時、高嶺村の上原村長の弟だった人が床屋を開業をするということでの所にやつて来ました。

そこで「台湾に行きましょう」ということになり、台湾で私は夜行列車に乗り、目的地に行きました。そして、それ以後ずっと理容業の仕事に従事しました。

◆おわりに

大山さんは多様な仕事をした後、長い間、理容師として理髪業の仕事をしていました。最後は沖縄県庁の地下で「ニューナイル」という理容所を開き、多くの人々に親しまれていきました。現在は現役を退き、自適な余生を送っています。

〔新聞で知る町の今昔〕

—癪病患者収容所設置問題—

八重山癪病患者収容所設地問題が大正時代初期に発生している。

「琉球新報」が

一九一六年（大正五年）九月八日紙面で最初に記事扱いし、そ

の後、同紙は大々的に癪病収容所設置の撤回に向けて世論を喚起。代議士、県知事、島司、県議にコメントを求めキャンペーント展開している。収容所の設置場所は西表島を計画しており、同問題に投げかけている。

●癪病問題委員会

既報の通り議得久、岸井兩代議士首里那覇在住の縣會議員、八重山炭坑開採者及記者團等昨日午后四時より旭橋附近の石垣庄宅に集合し左の事項を決議し尙ほ討機を計りて集合する事とし八時頃散會せり

▲決議事項

一來四日午后二時半首里那覇在住の縣會議員等へ出面し當二間り此お圍も引籠き面談する

三紀吾園より始不知事及高橋院事へ長又ハ單相を打つ事

▲記者團より（始不知事へ）

察收容所ヲ西表島ニ設置ス若右ノ事實ハシテセバ閣下ノ御電ニ依リ縣民ノ疑惑ヲ解キタルニ御返電ヲ賜ハランコトサ

請フ

▲記者團より（高橋院知事へ）

全生病院長光田氏八重山島ヲ既察セシハ痴患者収容所設置ノ爲メニテ既ニ既算ニ付入セリト聞キ縣下ノ與論御歌シフ、アリ県シア事例マリヤ御深知フシフ信セラ故止ノ事例既記カク認フ

「琉球新報」大正5年10月31日付記事

ついて住民の関心が高いことは、記事から窺える。

この問題が初めて「琉球新報」に登場した紙面は「八重山の死活問題」と主見出しを打ち、中見出しでは「光田氏は癪患者隔離島嶼実施調査乎」と疑問を提示。八重山マラリア病調査の名義で保健委員会

新聞記事には「光田健輔氏は実に第四部即ち癪病の委員たり。此れに依りて見れば風土病とは何等の関係なきを知るべし。然らば何故に光田健輔氏は八重山視察に行くや。（中略）本社の探知する所によれば光田氏はマラリヤ病の調査の名義なれど実は癪病患者隔離地調査に行くものの如し」と断言している。

癪病患者収容所設置に関する記事は一九一七年（大正六年）六月七日までにわたり二十四回もあり、「琉球新報」がいかに力をいれていたのかが分かる。記事はコラム「金口木舌」で政府に収容所設置の再考を促しつつ、光田氏の行動を弾する等、多彩である。代議士、県議の談話も積極的に掲載している。

「琉球新報」の撤回キャンペーンが大きく影響したのか、白紙を求める八重山郡民大会が開かれている。大会では収容所設置の反対決議を行ない、関係機関に要請するとしている。最終的に反対運動や予算等の関係もあり収容所設置は実現しなかった。

（通事孝作）



竹富町と与那国町とのスポーツ交流大会

『写真にみるわが町』

ースポーツ交流大会

沖縄県の市町村の中で数多くの島々を抱える多島町。と称される竹富町。一方、国境の島として一島一町から成る与那国町。両町は離島苦の同じ悩みを持つが、過去に体育行事を通して親睦交流を図ったことがある。それは町ぐるみのスポーツ大会で竹富町と与那国町で交互に開催された。最初にスポーツ大会が開かれたのは一九六四年（昭和三十九年）七月十一日、十二日で開催地は与那国町だった。竹富町からは崎田永起町長を団長に選手団が大挙、与那国町へ渡り盛んな声援を受けた。

竹富町役場に同大会を知る写真アルバムが所蔵されており、写真には選手が各種目に健脚を競う熱血シーンが随所に写し出されている。競技種目は陸上、野球、排球で地元紙は破格の扱いで競技結果を二回にわたり掲載している。

スポーツ大会は両町の親善ムードが高まる中、久部良小中学校で開会式が行なわれた。初日は野球、排球で熱戦を展開。応援団も多数詰めかけ、声援が飛び交った。競技結果は両種目とも竹富町が勝利を収めた。二日目は与那国中学校で陸上競技があり、観衆を沸かせた。熱戦の末、総合得点百五十七点を獲得した与那国町が優勝した。竹富町は百二十九点だった。

大会は翌年、竹富町で開かれた。しかし経費の負担過剰等もあり以後、開催されることになった。

（通事孝作）

《戦跡をたずねて》

忠魂碑

竹富島で最大の年中行事・種子取祭が行なわれる世持御嶽の境内の一角落に忠魂碑が、ひつそりと建っている。すぐ傍らには竹富町出身戦没者を奉った慰靈之碑



世持御嶽の一角にある忠魂碑

権の日本軍国主義のシンボルであり、慰靈之碑は去る太平洋戦争で亡くなった戦没者の御靈を慰めよう、と建立され自ど両者の性格は異なる。

忠魂碑は天皇に忠節を尽くした戦死者の忠君愛国の魂を慰め、その事績を顕彰するための慰靈碑の総称である。始まりは明治維新の内戦で、天皇軍の戦死者を天皇に忠義を尽くした殉難者として祀った招魂碑にあり

同碑は日清・日

露戦争を契機に戦没者が急増する中で全国各地に次々と建てられた。それは天皇に対する忠義の思想行動を顕彰強調する政治的、宗教的特徴を持ち、靖国神社と密接につながっていった。

があり六月二十三日の「慰靈の日」には町関係者が多數、参集し慰靈祭が厳粛に挙行されている。忠魂碑は戦前の天皇主

忠魂碑は八重山の四村（当時）に建立されたが、竹富村ではいつ、建てられた

のだろうか。同碑を見ると「大正庚申歳三月建設」と刻まれていることから一九二〇年（大正九年）三月であることが分かる。このほか刻印から竹富村軍人優待會が建設し、工匠は福岡功男が担当したことも判断できる。形式は二段重ね状の大小の台座の上に、ロケット形状の碑が建つ。大きさは全高約四メートル、下台座タテ、ヨコ約一・六メートル。それはコンクリートで出来ており、側の慰靈之碑より高い。

忠魂碑は大正期に建立されたが、除幕式が挙行されたのは十年後の一九三〇年（昭和五年）のこと。合わせて招魂祭も行なわれている。これは新聞の『先島朝日新聞』『八重山新報』から明らかだが、建てられてから十年後に除幕式があるとは何か特殊事情があったのだろうか。招魂祭は翌年も行なわれ導師読経、祭主、遺族、来賓等の焼香、弔詞があり在郷軍人警官の銃剣術、青年団の角力、仮装行列で賑わっている。

戦後、忠魂碑は建立が中止され次々と撤去された。しかし竹富町には戦争史跡として残っている。

（通事孝作）

《古文書紹介》

波照間島のクリヨン

(所有者) 屋嘉部 功

(製作年月日) 昭和二年三月十日

(法量) タテ二十七センチ、ヨコ三十九センチ

(材質) センダング

【表記】

(表) 吉凶記号 (○ ● ● ○ ○ ○ ⊕ …)

(裏) 永代暦毎月日観

【解説】

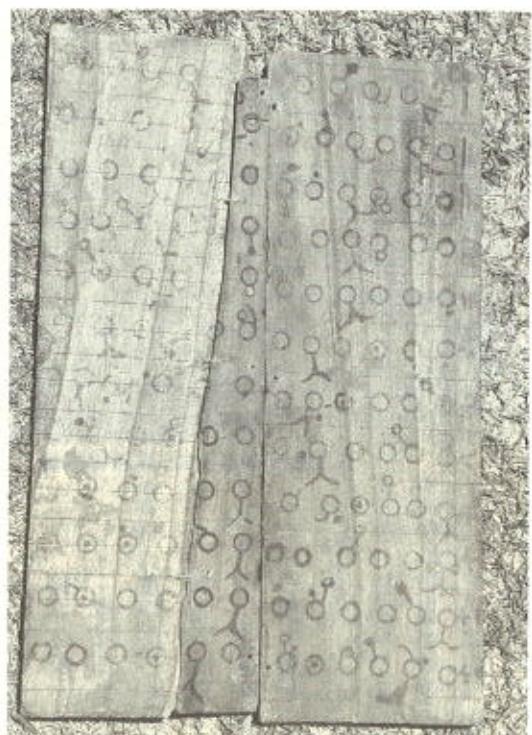
「繰り読み」の意味を表す「クリヨン」は、島で古くから住民の間で使用されていた。それは村落共同体の社会では深く時間と関わり、村人は何かをしようとする時、十二支を基本に吉日・悪日を決めていた。

「クリヨン」は一種の暦だが、伝承によれば大本家の人々が、中國に長い間、滞在したのち持ち帰ったという。また稻福家一族の役人が、文字を解せない百姓のために持ち込んだとの伝承もある。使用法は陰暦の各々の日は十二支の循環で数える。使う人は都合の良い日を計算する前にそれの適当な「カドウ」を決める必要がある。記号は各々、意味がありジンヌビンは「天の日」で不吉な日、デーミツィは幸先のいい日等である。

(通事孝作)



(裏)



(表)

《聖地めぐり》

—西塘御嶽—



公民館の北側にある西塘御嶽

竹富島に「西塘に負けるな」と島人が心に刻んでいた言葉がある。西塘は十六世紀前半に活躍した竹富島生れの政治家。古くから島民が敬慕し、誇りとする人物

で知られている。石垣島にオヤケアカハチの乱の時、琉球王府に身方した長田大主の妹・真乙姥を祭神とする「真乙姥御嶽」があるが、「西塘御嶽」は「真乙姥」と同じ性格を有する。それは双方とも英雄を神格化して奉り、祭祀場として設置された点で一致する。

八重山の御嶽を調査研究するには『琉球國由來記』『八重山島嶽々由來記』は欠かせない古文書だが、「西塘」「真乙姥」両御嶽とも由來記には記載されていない。だが島人が敬愛する人物を神格化し、心の依り処にした古びとの思いは現在でも続いている。

西塘については、各種資料を総合すると今から約四百九十年前、琉球王府から派遣されたオヤケアカハチ征討軍の総大將・大里親方に非凡な才能を見出されて首里に随行、王府に仕えた逸材として伝わる。そして在勤二十五年にして国王の祈願所である園比屋武御嶽の石門建築、首里城城壁の建築設計と土木関係の分野で天才ぶりを發揮した。これらの功績が認められて一五二四年、八重山の最高統

治者である頭職・竹富大首里大屋子を挙命して故郷に錦を飾った。

西塘は島に帰ると、行政の藏元を皆治原に設置して政務を執った。だが島は狭く、交通が不便なため中央官庁を置く場所としては不適当と判断、数年後に石垣島に藏元を移転した（『八重山島由來記』）。そこで西塘も石垣島に移り住み行政に当たるが、六年後に没している。

彼の死後、一時的に遺体は石垣島に仮埋葬されたが、役人の協議によって郷里・竹富島の旧屋敷内に墓が造成された。これが「西塘御嶽」と言われている。「真乙姥御嶽」と同様、墳墓が御嶽に変化した訳だが、西塘を慕う島人の強い思いを感じ取ることができる。

竹富島の代表的な民謡「しきだ盆節」は藏元創設、頭職のことが歌い西塘を誇りにしている。西塘が現在生きていることは竹富小中学校校歌からも窺い知ることができる。御嶽の管理運営は公民館が行なっている。年中行事は「西塘大祭」「四月大祭」「九月大祭」等が主で神司が祈りを捧げる。

（通事孝作）

収蔵図書紹介

山城善三

寄贈者御芳名	受贈図書名
山城善三	白装束の女たち「神話の島・久高」
	郷土芸能
	日本文明史
	宮城鉄夫
	平和への道
	お灸療法全書
	ふるさとの踊り
	増補・国のはじめ
	歴史と民俗
	琉球芸能全集・琉球の民話と舞踊
	南方民族誌
	沖縄考
	牧野日本植物図鑑
	日本民族論
	沖縄の夜明け・いのちを守る闘い

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

昭和外交史
商業と商人
近世沖縄文化人列伝
沖縄文化の源流を考える
日本の年中行事
沖縄（現状と歴史）
思い出の沖縄

沖縄の自由民権運動
沖縄千一夜
産業の大恩人・儀間眞常傳
沖永良部島民俗誌
沖縄人名年鑑
日本南方発展史
歴史を語る沖縄の海
琉球文庫第四編 琉球の盜賊伝
日本美術史年表
山原—その村と家と人と
平良新助伝
日本の方言地理学のために
南島の情熱・伊波南哲の人と文学
国語源流
大和民族の由来と琉球
日本民俗学体系

沖縄事情	読谷村役場
沖縄要覧	讀谷村関係戦前新聞資料・琉歌集
沖縄概観	沖縄諸島の民俗芸能
琉球音楽考	琉球文化財調査報告書
阿波木頭民俗誌	沖縄県文化財保護の手引
占領秘録（下）	琉球の文化 第二号
沖縄の民	沖縄市町村要覧
これば万国博だ	離島関係資料
沖縄教育論	沖縄県総務部
太平洋海戦史（改訂版）	名護市教育委員会
尋常小学校修身書	沖縄交流の推進について 針灸名護市文化調査報告一五
南方諸島の法的地位	琉球経済の発展
沖縄からの報告	沖縄関係雑誌記事索引
宜野湾市商工名鑑	沖縄の林業
七〇年沖縄の潮流	記録写真太平洋戦争史（上）（下）
琉球の五偉人	離島振興三十年史
大琉球島探検航海記	蔡譚本中山世譜
沖縄の戰跡	資料集2 仲宗根山戸日誌①
学徒従軍記	おきなわ今と昔
沖縄民俗（第10号）、（第13号）	日本民俗芸能V 離島・雜纂
日本民俗	島の概況
沖縄の交通史	大正区沖縄県人会
琉球重要樹木誌	法政大学沖縄文化研究所

読谷村役場	沖縄県教育委員会
沖縄諸島の民俗芸能	琉球文化財調査報告書
琉球の文化 第二号	沖縄県文化財保護の手引
沖縄市町村要覧	琉球の文化 第二号
離島関係資料	沖縄市町村要覧
沖縄県総務部	離島振興三十年史
名護市教育委員会	沖縄関係雑誌記事索引
沖縄交流の推進について 針灸名護市文化調査報告一五	沖縄の林業
琉球経済の発展	記録写真太平洋戦争史（上）（下）
沖縄関係雑誌記事索引	蔡譚本中山世譜
沖縄の林業	資料集2 仲宗根山戸日誌①
記録写真太平洋戦争史（上）（下）	おきなわ今と昔
蔡譚本中山世譜	日本民俗芸能V 離島・雜纂
沖縄県教育委員会	島の概況
沖縄市教育委員会	大正区沖縄県人会
沖縄県企画開発部	法政大学沖縄文化研究所
山城善三	大正区沖縄県人会結成五〇周年記念誌
山城善三	大正区沖縄県人会結成五〇周年記念誌

山城善三

軍閥興亡史

琉球要覽一九五五、一九六三／一九六八

改訂縮刷決定版 大東亜戦争

大東亜戦争全史 第三巻、第四巻

沖縄の戦後資料 第一集／第三集

南風原陸軍病院

占領秘録

アメリカの沖縄統治

おきなわ・昭和五六年度県勢のあらまし

沖縄県企画調整部
県経済の構造

読谷村史

久米島・具志川村史

渡嘉敷村史・資料編

新講沖縄一千年史（上）（下）

山城善三

山城善三
渡嘉敷村役場

古琉球の政治

日本文化史概論

琉球偉人伝

宮古島与那覇邑誌

沖縄写真案内

沖縄喪失の危機

山城善三

琉球大観

沖縄関係資料

歴史学研究法

昭和三年版 離島関係資料

昭和四年版 離島関係資料

昭和五年版 離島統計年報

昭和五二年版 離島統計年報

昭和五三年版 離島統計年報

過疎地域問題調査報告書

過疎地域問題調査報告書

沖縄県企画開発部
離島関係資料

沖縄開発庁
離島における産業振興調査報告書

沖縄精神風景
沖縄の観光経済

沖縄事情
沖縄精神風景

日本史の着眼点と急所
フィラリア葬送曲

沖縄の自然
カラー沖縄・南西の島々

ガイドブック・めんそれ沖縄
おきなわの旅

北海道斜里町

山城善三

業務日誌

- 一九九四年（平成六年）
- 三月九日 新聞集成Ⅰ、第二回分校正終了、グローバル企画へ送付。
- 三月一日 行政文書分類整理編纂保存業務終了。
- 三月一五日 行政文書分類整理編纂保存業務終了。
- 三月二二日 行政文書分類整理編纂保存業務委託（南山舎）。
- 三月二三日 町史だより第5号、印刷契約（八島印刷）。
- 三月二八日 新聞集成印刷製本業者・グローバル企画へ訪問し最終校正及びその他資料収集（二五日まで）職員二人出張。
- 三月三一日 備品購入。ビデオデッキ、防湿庫、カセットデッキ、物品売買契約、納品。
- 三月四日 行政文書整理編纂保存業務終了。
- ・新聞集成Ⅰ、グローバル企画より一〇〇〇冊納品（受領書・贈呈ケース等届く）。
- 四月一日 嘱託員、通事孝作更新。
- 四月四日 臨時職員、新本良明任用。
- 四月六日 町史編集室会議、四月の業務予定検討。
- 四月二八日 竹富町史編集調査協力委員会説明会開催。太平洋戦争竹富町戦災実態調査票記入要領及び、戦争体験記録原稿執筆依頼等を議題とした。
- 五月二日 戰災実態調査票記入要領（世帯用配付資料）作成。
- 五月九日 町史編集室内会議、五月業務予定検討。
- 五月十日 西表島東部、西部にそれぞれ職員一名日帰り出張し、戦災実態調査票の記入要領の説明。
- 五月十一日 戰災実態調査票記入説明及び聞き取り調査のため鳩間島へ出張（職員一名、一二日まで）。
- 五月二十六日 戰災実態調査票世帯用資料作成、送付。
- 五月二十日 戰災実態調査票世帯用資料郷友会分、富川印刷と印刷請負契約（一五〇〇部）。

五月二五日

沖縄県地域史協議会総会出席及び町史編集資料収集で那覇出張（職員二名、二八日まで）。

六月一日

町史編集室内会議、六月業務予定検討。

六月六日

戦災実態調査票納品（富川印刷、一五〇〇部）。

六月一三日

町史編集専門小委員会資料作成。

六月一六日

町史編集専門小委員会開催。「戦争体験記録」編集作業及び「新聞集成II」編集作業の取り組みについてを議題とした。

六月一七日

戦争体験聞き取り調査で小浜へ出張。（職員一名、一八日迄）

六月二一日

戦争体験、戦災実態調査票聞き書き調査で竹富島へ出張。（職員二名、一二日まで）

六月二八日

戦争体験聞き取り調査、西表へ出張。（職員一名、二九日迄）

六月三〇日

戦争体験聞き取り調査、波照間島へ出張。（職員一名、七月二日まで）

七月一日

新聞集成I、委託販売契約、文教図書八重山支店他六店。

七月五日

町史編集室内会議、七月業務予定検討。

七月二〇日

戦争体験聞き取り調査、西表東部出張。（職員二名、日帰り）

七月二七日

戦争体験聞き取り調査及び戦跡調査のため、西表西部へ出張。（職員一名、二九日まで）。

七月二八日

戦争体験聞き取り調査、西表島へ出張。（職員二名、二九日まで）

八月一二日

町史編集室内会議、八月業務予定検討。

・戦争体験聞き取り調査、波照間島へ出張。（職員一名、一三日まで）

八月二二日

戦争体験記録聞き取り調査及び、戦跡調査のため西表島へ出張。（職員一名、一六日まで）

八月二三日

波照間島ムシャーマ取材及び撮影のため、日帰り出張。（職員一名）

八月二四日

戦争体験聞き取り調査、竹富島へ出張。（職員一名、二五日まで）

編集後記

◆『竹富町史だより』第六号を発刊しました。今号は『竹富町史』第十一巻資料編「新聞集成Ⅰ」の発刊をトップに扱いました。それは同書の内容を紹介するとともに、発刊までの経過、編集構成等を町民の皆様に知ってもらおうということで盛り込みました。同書は写真集『ぱいぬしまじま』に次ぐもので、資料編の先駆けを成すものです。編集の基本姿勢は読み易く、親しみやすく、かつ資料的価値をもたせ、利用する皆様が気軽に使うことができるることを根底に据えました。

◆「戦さ場の実相—島じまの語り部たち」は、町史編集室に寄せられた戦争体験録を紹介するもので、読むと戦争の一端を垣間みることができます。「歴史の証言」では大正十二年頃の小浜島のカツオ漁業の様子を大山朝康さんに語ってもらいました。カツオ漁の全盛期だった島の様子が証言から浮かび上がります。



竹富町史だより 第6号

平成6年9月30日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷